

すぎなみNPO・ボランティア元年2002
「環・すぎなみ豊かにいきる」報告書より

『杉並NPO・ボランティア活動推進センターのこれから』

- 区民により検討されてきた今までの経緯からこれまでの課題を明らかにし、

これからのNPO・ボランティアの推進やセンターのあり方をさぐる対談

日時：10月12日13：30～14：30

会場：阿佐谷地域区民センター第4・第5集会室

コーディネーター：安藤 雄太さん：東京ボランティア・市民活動推進センター副所長

対談者：小池 曙さん：さんし会

対談者：西脇 世津子さん：NPO法人「たすけあいワーカーズさざんか」

安藤

それでは早速、対談を始めさせて頂きたいと思います。

このセッションは、今総合司会の方から説明がありましたように、また、先程の杉並区の小林助役の説明にもありましたように、現在の大きな流れである、区民が主体となりながら活動していくNPOの動きやボランティアの動きのような支援性の活動というものが、これから非常に大きくなっていくと思われます。これからの時代は、私達の生活のより豊かさを求めていく中で、行政や大企業だけに豊かさを求めることは出来ないし、お互いに市民同士が支え合うという仕組みがどうしても必要になってくる社会になります。そういう意味から、この新しいセンターが立ち上がったことは、それなりに大きい意味があるのですが、その立ち上がってくるまでの間には、様々な角度から色々な人達が議論して、このセンターの方向性が論じられてきました。

今日は、そういった、論じられてきた、また様々な意見を聞き入れながら今日に至った過程と、そこで何が大きな課題になったのかということをお話の中で皆さんにご報告させて頂きます。そして、その次に、自分達の杉並区の中で私達は何をやるべきで、どんな夢があるのだろうかを語っていくセッションに続けていきたいと思っています。先程のお話にもありましたように、今日まで3年間の中で色々な議論がされました。最初は杉並の地域活動を進める区民会議ということで立ち上がりました。しかし、普通はこのような委員会のメンバーを行政が選んで、そして行政の中で一つの委員会として物事を決めていく流れがほとんどなのですが、この会議は珍しいことに、「このことに関心のある方は何方でもどうぞ」ということで、関心をお持ちの約35名の方が出席されました。無論、このNPO・ボランティアに関心のある方達ですが、当然、それぞれの人が活動している立場から参加された方がほとんどですが、このような

動きをやりながら、新しい考え方を実践してきました。

そこには杉並シッブという、これからの行政と市民とは協働するという新しい考え方を打ち出しました。このようなことをふまえ、更にもう少し具体化しようという動きから、その区民会議にいたメンバーの方と関心をお持ちの方達で、杉並の地域活動を進める「区民懇談会」を立ち上げさせて頂きました。これは更に人数が絞られまして、約25名のメンバーで検討を加えていきます。検討内容は、このセンターがどうあれば良いのだろうか、どのようなものが私達の考えを進めていく上で、どういうセンターの機能があれば良いのか、市民の活動だから行政とは違う活動をしよう、というようなことも踏まえながら議論させて頂きました。この辺のことにつきましては、次の対談者の方々から中身はどういう物なのか、ということをお報告して頂きますので今は省かせて頂きます。

そういったことを踏まえて、では実際にセンターを何処に立ち上げるのか、どういった団体がやるのかというようなことを更に具体化するために、杉並NPO・ボランティア活動推進センター設立準備会というものを持たせて頂き、今日に至ったという流れです。この経緯の要旨につきましては、今日皆様方に会場入り口でお配りしております、薄いピンク色のしおりの中でそれぞれの考え方を表す概要版が載せてありますので、それを是非見て頂ければと思います。

このような活動を経て、今日のセンターに至ったのですが、もう一つ大事なことは、先程小林さんからお話が出たように、このような、市民が活動していくための行政の基盤整備を含めて、どのような役割をするのかということをお話を地域活動支援条例として条例化を進めたという部分がありました。その概要がそこに書いてあることです。

このようにして、「流れが来た」ということを踏まえまして、これからの内容について、少しお話しをさせて頂きます。

ある意味、この世の中の動きは大きな流れでして、決して杉並区だけの動きではありません。日本全体において、このようなNPOの動きが大きく流れて来ています。

ご存知のように、NPO法と言われる法律が作られ、現在、約1万に近い数のNPO法人が、全国で立ち上がっておりますが、やはりこれは大きな日本の流れであるし、これからの流れだと考えていますし、各都道府県段階におきましても、また杉並区のように全国の各市町村におきましても、こういうNPOの市民の活動を一緒にやっという、支援していこう、そのための体制整備の話し合いなどを含めまして、NPO支援政策は各地方自治体で生まれていきます。

例えば、条例化であったり指針であったりというようなこと、また本日のような新しい支援センターというようなものが全国に作られてきているというような動きです。そういう現在の動きの中で、ある意味で、この杉並のセンターが全国にこの動きを発信していくという役割も、もう一方では持ちながらのこ

れからの活動なのではという風に考えておりますが、では、これからの活動と言った時に、どのような課題が出て来るのか、一個一個クリアしなければならないのが、これからの大事な問題であると思っております。

このような事情、流れを背景としまして、早速お二人の対談に入っていきたいと思っております。今日、区民会議からの関わり、あるいは懇談会からの関わりの中で、このセンターの立ち上げ、また協働という考え方を作ってくるという動きでしたので、ここに関わったお二人に登場して頂きました。

お二人からはその時に話したこと、また話さなかったけど、実は私はこう思っているというようなことを含みながら、少しざっくばらんな対談にさせて頂ければと思っておりますが、まずお二人を紹介させて頂きたいと思っております。

お手元の資料の中に、この対談をして頂く方のプロフィールが書いてありますので、そちらの方を参考に見て頂ければと思っております。

お一人目は、皆様方から向かって私の右隣にいらっしゃいます、NPO法人「たすけあいワーカーズさざんか」の西脇世津子さんにご登壇頂いております。

西脇さんは、地域の様々な奉仕活動等を含めて、地域の活動を展開されてきています。西脇さんは区民懇談会から参加頂きながら、そこで感じた様々なことをご報告して頂きたいと思っております。

そして、その西脇さんのお隣にいらっしゃいますのが、「さんし会」の小池曙さんです。

小池曙さんは、杉並第五小学校のPTAを勤めながら地域活動を展開されておりますが、その中で、この「さんし会」は区民会議の最初から関わって頂き、この準備会まで関わり、この新しいセンターの立ち上げに尽力して頂いた方です。そこにおける様々な課題をご報告して頂きたいと思っております。

それでは早速、お二人に、日頃この間を通して考えたことをご報告して頂きたいと思っておりますが、最初は小池さんから区民懇談会や準備会を通して、小池さんにとって何が課題で何が大事だと思ったのか、そんな所をざっくばらんにお話し頂ければと思っております。宜しくお願いします。

小池

今、コーディネーターの方から、ざっくばらんというお話しが出ましたが、こういう話をざっくばらんに話しますと、少々まずいことにも触れることになりませんが、これはまた、止むを得ないことでもありまして、いかに行政機関だけではなくて、我々市民サイドにも問題があるかということを含めまして、その辺はプラスマイナスゼロということに理解して頂きたいと思っております。

今日のテーマである、ちょっと長い題ですので単にセンターと言わせて頂きますが、このセンターのこれからを語る時に、ここが完成するまでの3年間に行政との間にどういうことがあったかということに述べなくてはいけないと思っておりますので、その辺を含めてお話しさせて頂きます。

少し具体的に言いますと、「さんし会」は平成11年の9月から活動を開始しまして、現在、コーディネーターさんが言われた通り、35名が参加しました。

しかし、初めは全く懇談会の経験もない素人の混成部隊だったのですが、結果的には行政の言うところの協働を目指したと思うのですが、これは協働以前の協働作業にもならないような、全く行政主導の活動であったと、活動者からの提言という報告書が出されてしまい、その間6ヶ月間もの期間が費やされてしまいました。そして、それを受けて、半年後の同年の9月に、これを更に具体的に進めるということで、遂に念願の活動をスタートしたわけですが、これも大変な問題がありました。

まず、懇談会は何をするのかということを中心に行政に回答を求めましたが、行政側は活動支援計画だということを示しました。しかし、これに約7ヶ月間もの時間を費やしてしまいました。しかし、その途中で町内の一部の方から、まだ条例も出来ていないのに何故活動支援計画なのかという声が出まして、また仕切り直しということになりました。そして、その仕切り直しの一つのテーマとして、「条例制定に向けての方針」という形を再度作り直したわけですが、その時点で、委員が21名いて、その他にお手伝いして頂いた方が3名いたのですが、その中でも自分達は何をするのか分からないで参加していて、迷っている方もおられるようでしたので、ここで一回、このまま続けて良いのかということ意志確認しましたら、結果的には4名の方が脱退されました。やはり、流れに任せて勤めている方が多いですね。その時点で、やはり素人集団ですので、効率が悪いということで、学識経験者2名をメンバーに加えたわけですが、その中で安藤さんが加わったわけですが、それで、更に作業を進めまして、色々な方針などが話し合われたのですが、この話し合いには約15ヶ月が費やされ、会議の内訳は全体会議が21回、質問会が9回で、合計でなんと30回も会議が行われました。それが平成13年11月に終わりまして、明けて平成14年3月、いよいよセンターを立ち上げるという具体的な準備活動が行われましたが、その会議が10回開かれました。それが今年の3月に始まりまして、実際にこのセンターが10月1日には、もうオープンということですので、実際にオープンする準備に2ヶ月費やしました。7月末に実行委員会を立ち上げましたから、オープンの2ヶ月前まで、どのようにオープンするかという準備をしたこととなります。このように本当にきついスケジュールでこなしてきて、オープンの時を迎えましたが、この中で、いわゆる協働というものが、本当に協働として行われていくかどうか、もしかしたら単なる共同作業を協働と勘違いしてはいないかということも含めて、語り合ってきました。

安藤

はい、ありがとうございました。小池さんからは、センターを作っていく過程の中で、どういう作り方をしてきたかということをご報告して頂きました。ただ私達はどうしてもNPOという一つの動きにつきましても、これは日本の歴史の中で辿ってみれば、昔はNPOとは言いませんでした。しかし、1980年代の頃から、こういった市民の活動が大きく動き始めたわけですが、そういう動きの中で、NPOというものが誕生しました。しかし、私達は一体NPOと

はなんなのか、あるいは市民活動とはなんなのかを概念的にも十分に理解していないのですが、こういう動きが非常に広まってきているし、必要となってきたことを肌身で感じてきたわけです。

そういう中で、協働とは一体何なのか？ そして、協働と言っても、先程小池さんがおっしゃっていたように、一緒にやらなければ駄目だということかということを議論するわけですが、その前にルールとは一体何なのか、ということについて、区民会議の中で非常に議論しながら、作り上げてきました。これは、また後程、小池さんからお話しをして頂きたいと思っております。

ところで、西脇さんの場合は区民懇談会からご参加頂きましたが、ご参加頂く中で、NPOとの協働という部分について、あるいは実際に西脇さんが地域の中で活動されてきて、この動きをどういう風に見ていらっしまったのかを少し御披露して頂けたらと思います。

西脇

はい、私は福祉の関係で6年前から地域活動をしていますが、この懇談会に出席して、非常にたくさんの活動内容、そして規模も経験も様々な方達が参加されていまして、この会議の行方について、とても一つにまとまっていくなのは大変だなあ、という感想を持ちました。そして、今お話しがりましたが、仕切り直しをしなければならないような状態が、本当に当然の結果として出てきたのではないかなと思いますし、ああ、これからセンターができてからも運営は大変だろうと思いました。

それから、設置場所についてのお話しが出た時に、これは懇談会で十分話し合っ、そして市民との協働できちんと決められるべきだという気持ちを持っておりましたが、実際はそうではなく、こちらの希望とは違う別の場所で、何か決まりかけるような動きもありまして、それに対しては委員のほとんどから、その場所がセンターの場所として相応しいかどうかを検討したうえで決めるべきではないか、という意見が非常に多く挙がりました。そして、それは十分に受け入れられて、今日ここにとても良い場所に出来たわけです。それから、仕切り直しをする前の件でも、センターについて具体性がなかなか持てなかったのか、例えば、どの位の予算が必要なのだろうかというような話し合いについて、あるいは、どんな規模だったら、どういうことが出来るのか、というようなことがほとんど疑問としても意見としても挙がらなかったということがほとんどで、行政主導に近い物になったかなと思いました。その辺は、やはり私達NPOの中での話し合いがまだまだ足りない、これから力を付けていかなければならないのではないかなという反省でもあります。

安藤

はい、ありがとうございました。こういった物を作り上げていく時にまとめるのは大変だったというご感想を頂きました。恐らく、「まとめる」という方向性は必要なのではと思うけど、逆の捉え方をすると、まとめるのが大変という

ことはそれだけ色々な考え方をお持ちの方がたくさんいるという、「豊かさ」を持っていると考えると、私は杉並区というのは人材的にも豊かな場所ではないかと思えます。ただ、これを一つの物にしていくという時に、やはり、そのプロセスというのは非常に時間が掛かるものだと思いますが、実はこれは、ある意味では、3年も掛かったぞ、という人もいれば、3年も掛けたということをする人もいると思えます。しかし、どちらの価値を取るのかは非常に重要なことでして、逆に3年掛けて多くの人の意見を聞きながら、違う意見ではあるのだけれども、こういう風にしていこうね、という同意を採っていくプロセスが非常に大事だと思います。

これは先程、西脇さんがセンターの場所を決める時に、行政にここだと言われた時に、いや違うというようなことを市民側から言ったとおっしゃっていましたが、私達の行政と市民という関係ですと、行政から言われた場合には、「もう、しょうがない」というような考え方が、長い歴史の中で培われてきた部分だと思います。ところが、そうではないのだよという、市民が活動している中で、皆で合意して物事を決めていく。実はこれが民主主義の原点であるということなのですね。ですから、そういう意味で、この民主主義の原点を、この新しいセンター作りにかけたのではないかなと思えます。

ところで、今、お二人には、それぞれセンターを立ち上げる準備段階に関わって頂きながら、その時の問題を少し提起して頂きました。この中で、お二人とも市民活動から出てきておられますし、また、この区民の懇談会や準備会の中で、それぞれ出されている協働という言葉が、お二人から出て来たわけですが、では、協働とは一体何なのだろうかということをし議論してくるプロセスの中で、行政との協働とは一体何なのか、そしてどんなことが大事なのか、どんな風に捉えたら良いのか、というようなことが、多分議論の中にたくさんあったのではないかと思いますので、この辺を少し、小池さんと西脇さんと議論して頂きたいと思えます。意見の違いもあると思えますが、どうぞ宜しくお願いします。

小池

協働というのは散々言われてきましたが、これを一つにまとめる時に、まず文字で書くということが一番簡単ですね。しかし、しっかりと提起しますと、きちんと役割分担をして、お互いに指摘し合おうということなのですね。ですから、何も成立していないというのは、何も責任を持たされないというか、「最終的に責任は行政が持つのだ」、みたいな、行政が責任を持たなければならないのだから、ここまでしか出来ないというような、そういう役割分担をするという考え方に欠けていたのではないかなあ、と私は思うのですが、行政の方が何人か見えておられますが、「いや、小池さん、そうじゃないよ」という感じを持っていらっしゃる方もいるかも知れませんが、その辺は御容赦下さい。

西脇

そうですね、一言で言ってしまえば、やはり行政サイドに協働ということが全然分かって頂いていない、と私は事業をする中で非常に強く感じています。もちろん、担当者にもよりますが、どういう点が分かっていないかと言いますと、行政の場合には予算があって、そして、きちんとしたものが全部決まっています、事業が動いているのですが、私達の場合には、勿論事業計画とか予算はあるのですが、最初に理念があって、そして仕事が始まっていくというところがかかなり大きく違うのかなと思います。

それからもう一つは、行政が立てる予算の場合には必ず人件費という項目が必要なわけですね。事業予算では人件費は別の枠であって、そして行政がその事業に対して仕事をしますが、私達が協働で事業をする場合には、人件費も含まれて仕事をしている、というその二つが違うのかなと思っていたのですが、その辺が行政側に理解されていないくて、そういった所が協働を上手にやっていく上で、難しい所になっているのかなと思っています。

安藤

ちょっといいですか。私も行政側の課題が幾つかあると思っています。そして、多分これから、こういうNPOの動きというのは、今、西脇さんに指摘して頂いたような仕組みを変えていくというところにも大きく問題提起をしていると思いますが、西脇さんが言っていた「理解されない部分」を、逆に小池さんはどうお考えですか？

小池

それは理解されていない、ということではなくて、西脇さんが言った、民間と行政の仕組みの違いだと思います。例えば、このセンターにおいても同じことが言えます。

このセンターを作る時に私達が目指したのは、行政が関与せずに市民会で行うことですが、なかなかそういう力が備わっている民間の団体は存在しないのですね。では、今の話しでもそうですが、社会福祉協議会が色々と活動していますが、言ってみれば社会福祉協議会というのは、行政に委託されているわけですから、行政が行っているのと全く同じです、いかにその影響力を受けないで活動していくかということになると思います。しかし、実際に活動をする時に、助成事業として関与するのは良いと言えますが、委託事業としてやっていくのかというところで大分意味が変わってきてしまうのですね。そういうところで、今西脇さんが言った、予算の使い方が大きな問題点になってくるのですね。民間団体だと人件費も自由に使えますし、包括予算も自由に出せるかどうかという問題になってきます。そういうところに掛かってくると思います。

西脇

つまり、今は協働、協働と謳われていますけれど、そういった仕組みをきち

んと整えなければ、協働は機能していきませんが、その辺について、行政にNPOから働きかけていくことが必要になってくるのではないかと思います。

安藤

皆様方のお手元にある資料ですが、先程言いましたように、条例を作るために検討させて頂きました。その前に区民会議の内容で先程から言われているように、協働とはどういうことなのかということを経験して、一つの考え方をさせて頂きました。それがお手元の「ボランティア・NPO活動の推進をめざして」という概要版の2ページ目に、協働の基本的な考え方を8つ出させて頂きました。

そこにありますように「対等の原則」とか、「公開の原則」、「話し合いの原則」、「相互理解の原則」、「目的共有の原則」、「自主性尊重の原則」、「自立化尊重の原則」、「時限性の原則」という八つの原則です。

一見、「当たり前じゃないか」と思うのですが、この当たりの部分がなかなか出来にくかったということが問題としてあるわけです。

このことは、これからこういった考え方を元にしながら進めていかななくてはいけないのしょうけれど、今、西脇さんからも小池さんからも指摘して頂きましたように、こういった物を市民サイドでこういった風に作っていくかという時に、行政側から抗議が出るということも場合によっては、恐らくあり得るわけです。この理由は行政の経費は、基本的には私達が納めている税金ですよね、ですから、それをどういう風に、効率的、効果的に使うのかということが、大事になってくるわけです。その時に小池さんが言ったように、補助金なのか委託金なのかというように色々な考え方があるわけです。実はこのセンターを運営するにあたっては、公設民営という形をとりましたが、委託金ではありません。何故委託金ではないかと言うと、これは議論させて頂きましたが、実は委託金というのは行政の仕事なのです。行政が責任を持って行う仕事が、それを他の所に行政が直接やらせる、これが委託なのです。ですから、結果的には行政の仕事なのです。

でも、補助というのは、元々民間がやっている活動を、これは行政政策とほぼ一致するし、行政政策を更に有効に伸ばすことが出来るということから、それを推奨するという事で補助金を出しましょう、というのが補助なのです。ですから、大雑把に言いますと、補助というのは民間サイドに立った公的財源の使い道を指しています。そこで、このセンターはあえて補助を選びました。ですから、そういう意味では、先程西脇さんが「お金の使い道は、もうちょっと自由でいいのではないか」とおっしゃっていましたが、もっと民間サイドに立って、お金の使い方を自由にした方が、それが民間団体の能力を伸ばすのだよと言われましたが、実際にこのような活動を通して民間の団体は成長するものです。

このように、このことはNPOが行政と協働する時にとっても大事なことにな

ります。

西脇

私達は事業の委託として、この夏から知的障害者のガイドヘルプというものを始めております。それは、私達が元々やりたくて、更に杉並区に必要だと思っていたことで、3、4年前から区の方に提案していたものだったのですが、それを私達の仕事としてではなくて委託として今やっております。それは、区に下りて来る予算の関係で委託という形になっていると思うのですが、委託ですので、色々な決まりがありまして、事業も決して私達が思っているようには出来ないということがたくさんあります。それは、例えば、先程、申し上げたのですが、人件費という項目がほとんどありません。どういうことかと言いますと、事務所には電話が必要ですよ。それから、コーディネーターも必要です。こういうように、必要な物を羅列して予算を作っていくのですが、電話番の人はいなくて良いのか、留守電だけで良いのか、というような予算の組み方をされてしまいます。それで私達はコーディネーターに連絡する係というようなものを必要だということを行政に申し上げて、なかなかその辺の仕組みがきちんと決まってしまうものですから、どうにもならないわけです。そしてまた、「コーディネーターは1件300円だ。」というような言い方で、これも私達の提案というものが全く通らないで、行政の方から「これだけです」というような形で予算が来てしまいました。しかし、それでも色々とお話し合いの中で、大分数字としては現実に近いものにはなってきたのですが、考え方としては、全くその仕組みがあるために歩み寄られていない、という委託の事業を受けています。

そこで、その事業が本当に委託であるべきなのか、補助であるべきなのかといった時に、やはり区だけの予算で都は動いているわけではなくて、都からとか国からとか予算が来ますので、どうしても私達がどちらであるべきか考える前に、それはもう決められたこととなって、それ以上のお金は区が全部出さなければいけないという予算の仕組みがありますから、大変厳しい状態なのだという事は理解出来るのですが、私達としては一緒に事業をやっていくうえで、非常に苦労するという所でもあります。

安藤

小池さん、今西脇さんが「行政に縛られた」とおっしゃっていますよね。先程、小池さんが大事だと言っていた中で、民間と行政の関わり方の難しさということを手挙げておられました。今の西脇さんの話を聞いて、このセンターのあり方や、NPO設置のあり方の難しさを改めて感じました。

小池

非常に難しいですね。民間と行政の意見がそぐわないですからね。これは正に行政内部にブラックホールと言いますか、その仕組みがどうなっているのか

全く見えないものでして、困ってしまうということがありますが、これは個別に対応することは出来ないかも知れませんが、今日のテーマである「センターのこれから」ということで、センターがそういうことを色々提議したり、変えていけるかどうかということなのです。

行政内部でも、行政はこれではいけないよ、ということが多々あります。では、何処をどうやって切り崩していけば良いのかということなのですが、残念ながら蟻の一穴が見付からないのです。何処を切り崩していけば、自分達が矛盾を感じていることが直していけるのかということですが、その解決のために、会議の後に必ず延長会議があって、色々な内容の延長会議がありますが、世間話しはしないで、そのことに関してのみ話される、正に延長会議なのですね。その中で、何処を切り崩していったら良いのかということをお話し合うのですが、結果はいつも解決しないまま、「じゃあね」という風になってしまいます。

先程、西脇さんが言った設置場所の問題ですが、これについて話しますと、「いかがでしょうか」という風に行政に相談しますが、本当の協働というのはそうではないと思います。そのように、私達が行政に相談する前に、「いかがでしょうか、お許し頂けますか」というような形で進んで行ってしまいます。それが3年間の中での、特に準備会の中ではかなり変形されたと思います。それと、私と長年の間、行政の中で個人的にお付き合いをした人の中で、かなり言いたいことをその人に言っていますから、中には「小池さん、それは違うよ」とか、「いつもそう思っているけど、いつもこうじゃないか」というように、かなり激しい議論が出来る場面もありましたけど、これは個人的な付き合いがあったから出来たことで、皆がこうでなければいけないと思うのですが、このようなことが出来ないのは両サイドに問題があるからです。これは行政側にも問題があるし、我々市民サイドにも問題がありますから、ただ行政機関のせいにしていくということではなくて、お互いにどうすれば良いのか考えることによって、別の意味で協働出来たという部分もあるわけですね。

安藤

協働というのは、確かに難しいのですが、難しいことをやっていかななくてはならないということを私達は体験させて頂きました。もう一つ、西脇さんの言葉を借りれば、色々なNPOがあって、それが行政と協働していく時に色々な問題があるのを、どういう風にセンターがバックアップするのかということが役割ではないのか。そうする時に、このセンターがどういう風に民間性を感知すれば良いのかということも、実は大きなテーマだと思います。その辺のところを、逆に西脇さんがどう感じられたかということと、それに対して小池さんにご意見を頂ければと思っております。

西脇

実は、先程、私達の提案が事業となって協働に発展したとお話ししました

が、その時に協働のスタートが曖昧で、公開性がなかったということを非常に懸念しました。

具体的には、私達は役所の方に、こういったことが区内に必要なのではないかという意見を出して提案していたのですが、ただ、だから私達はその委託を受けるといことはおかしいのではないかと思いますし、こういった仕事を必要だと思うグループやNPO法人なりが他にもあるかもしれないし、その提案についてはどうあるべきかということ、その幾つかのグループの人達と話し合っ、何処が受けるかということは、ある基準をもって決めて、そして皆が納得したうえで、その事業所の協働が始まるということが本当の意味での協働ではないかと思いました。そして公開性を持った協働ではないかと私達は思いました。勿論、どうあるべきかということは全員の意見としては一致しましたが、なんとなく済し崩し的に私達に依頼が来たという感じでした。

勿論、役所としてはきちんと順序をふんで行っているのですが、それは私達が知的障害者の方達のホームヘルプを区内で一番たくさんさせて頂いている事業所なのです。そういった意味では、実績があるからということで私達の所に委託というものが来たのですが、真の協働ということであれば、新しい仕組みを作る時には、もう少し市民からの意見は公開性を持って受け入れるべきですし、何処の団体に依頼するのかといった場合に、もう少しきちんとした尺度と言いますか、そういった物を作っていく必要があると思いますので、このような場面で、このNPOセンターが力を発揮出来るのではないかと思っただけですが、如何でしょうか。

安藤

今のご意見にあったような、一つの基準とか公開性も勿論大事なことですが、小池さんとしては、これを作ってくる時に今西脇さんが言ったセンターがそういう行政ではない、いわゆるインターメディアリーの役割でしょうから、そうした時にどういったセンターが民間として、きちんと出来るのかという議論をしたと思うのですが、その辺はどうだったのでしょうか。

小池

その辺も議論しましたが、全国各地のセンターが必ずしもこのことを議論することはありません。なかなか上手くいかないという感じですが、これは多分、日常の業務に追われてしまい、今これからセンターがどうあるべきかというビジョンとかコンセプトといった物を持っていなかったのではないかと思います。

ですから、我々がこれから目指していかなければならないのは、そういうきちんとした、センターとしての方向性をしっかり持って、どういう役割を果たしていくかということも明文化していくことではないかと思っます。

現実には、そういった行政の中での色々な条例や、提案されていることもなかなか実現しないこともあって、これは良い意味ですが、最近はやたらにア

クション感覚で自己批判が色々な委員会で実行されてしまって、その結果、実行改革するということが、1年後でも2年後でも然るべき継承をしなければ実行改革出来なくなっていますが、今まではきちんとそういうことがされていなかったと思います。

ですから、きちんとしたビジョンとコンセプトを持つべきではないかと思えます。では、これをどのように具体的にしていくかということは、先程も言いましたけど、政策定義的なこと、つまりNPO活動の実態というものを把握して、行政に訴えていくことが、一つの方法ではないかと思えます。

安藤

はい、ありがとうございました。やはり、それを行うには、懇談会や準備会の中で議論になったことだと思いますが、今のこのセンターの事務的体制だけでは到底難しいという議論をしましたよね。この辺はどうなのでしょう。そういう提言活動をしながら、色々な事業を展開するという風になった時にどうなのでしょう。

小池

提言活動をしながら事業を展開するのはちょっと難しいでしょうね。何故かと言いますと、今まで区民会議では、そのことは扱われてきませんでした。懇談会から準備会に至って、一番問題になったのは、やはり設置場所の問題で、次にいかに民間性を確保するののかの問題、それからスタッフ体制の問題で、これはどういうスタッフ達がいたら理想的な機能が果たせるのかという問題でした。

結局、ご存知の方も多いと思いますが、今の人員体制というのは、今までの杉並ボランティアセンターがそのまま発展して、現在もそのまま運営されているわけですし、常駐スタッフもその時と同じメンバーの方でして、それが3名で行われています。

現在はスタッフは増えました。ただ、私達が目指したのは、常駐スタッフに関しては、その活動を広げていくことなのです。当然、目指しているものは行政から知らされていませんが、今までの社会福祉協議会の中の一組織として、ボランティアセンターの福祉活動が行われています。この福祉活動が段々と間口が広がってきたという意見もあって、現在も積極的に活動しているわけですが、間口を広めて積極的に活動しようという中で、現在の体制で出来るのかということがかなり懸念されているのですが、これははっきり言わせて、現在の3名の常駐スタッフでは出来ないと思えます。ですから、その中で、予算的には再来年になってしまおうと思えますが、どれだけスタッフ体制を充実させるかということは、行政にどれだけの影響を与え、そういうことを提言していきけるかどうかということではないかと思えますね。その辺が先程から繰り返しておりますが、これからのセンターのビジョンとコンセプトではないかと思えます。今までのように、ただボランティアセンターの延長線上の同じ物では、

どうにもなりません。勿論、無駄ではないですが、新しくセンターを立ち上げた時には、あまり意味がありません。ですから、その辺をきちんと議論しなければならないと思います。

安藤

はい、まさにそうなのですね。その辺は大きく領域が広がってきているし、先程、最初に、なかなかまとまらなかったという話がありましたが、それだけ多様化しているということを受け止めながら、どうやるかということが、やはりこのセンターの大きな役割でしょう。センターをどう支えていくのかというのは、一方では行政の役割かも知れませんが、多分大事なのは、こういう活動をされている方々が、お互いに支えて助け合える関係をどのように作るのかということが必要なのだらうと思います。

最初に小池さんがおっしゃっていた時のような協働の場合は、行政側も市民側も役割と責任を持つということが協働なのだと言い方をしていましたが、それは逆に言うと、行政側の問題をたくさん抱えているわけですが、では、我々市民側と言われているこちら側の問題というのは、一体何なのかということをお教えいただけますか。例えば、どういう風に責任を取るとかですね、そういう所をお教え下さい。

西脇

そうですね、この常勤、非常勤、センター長というのは、税金で賄われているという部分だと思いますが、やはり市民が、あるいは協働という中に、今日のシンポジウムに事業所という所が出てきていなかったのですが、私達が提出した答申の中には事業所という言葉も出て来ていると思います。そういったものを市民が取り込んでいく、巻き込んでいくということも一つ非常に大事なのではないかと思います。各事業所は自分達が地域の中で、どれだけ活動しているのかという社会貢献の度合いを見せたいと思っていることはたくさんあります。そして、その活動を応援しようと思っているところもたくさんあります。それを上手く引き出していくというのも、市民の一つの仕事だと思います。

安藤

ある意味では協働というのは、まさに我々が今、進めようという市民側のセクターの動きと、行政のセクターの動きという意味での協働が大事な部分で、やはり企業というセクターがトライアングルの状況をどう作るかということがありますよね。どちらかと言うと、この市民活動というのは事業主と相対するという立場もあって、「どうも違うなあ」、という部分があったりもしますが、今、西脇さんが事業所も一緒なのだということをおっしゃっていましたが、実際に一緒に行動を起こす時、何が大事で、どうしたら良いのでしょうか。

小池

何が大事かと言いますと、問題なのは、先程も申し上げましたが、共同作業を協働と間違えているという、勘違いしている意識の問題が一番邪魔していると思いますね。一緒に作業して一緒にやったから、これがイコール協働だと思っているわけです。

このような意識を変えていかないと駄目なのですが、では、どうやって意識を変えていくのかというのが問題ですよ。その中で、いつも出て来るのが、行政と市民と事業所との話し合いですね。しかし、話し合いの内容にもよりますが、やはり意識が変わるのかということが一番大事だと感じますね。

安藤

西脇さん、では意識を変えるにはどうしたら良いでしょうか。

西脇

そうですね、大変難しい問題だと思いますが、一つは、自分達が杉並のまちづくりを目指していくのだということ、活動していく人達に教えることが非常に大事な事なのではないかなと思います。これは今まで行政がやっていたことでも、自分達が出来るとは自分達で行っていくことによって、そこから協働が生まれていくのだということだと思います。そして、行政と同じことをするのであれば、ただの下請けと言いますか、そんな感じになってしまうと思うのですが、そうではなくて、自分達が作りたい物、自分達が目指す物を市民がやっていくというところから出発するのが協働だと思います。そして、現在、税金に限りがありますので、それを例えば事業所から引っ張ってくるという方法も必要ではないでしょうか。それは、今度のセンターもそういったことも十分考えていく必要があると思いますが、そこを今までやっていたことを行政の仕事から私達が行うことになったら、それはもう本当に協働にはなりません。

そこで一番大事なのは、私達が考えていること、つまり理念と言いますか、そういった思いを実現するために行政の方からもお金を出してもらって、そして事業所からも出してもらって、その辺の考え方を踏まえてきちんと意志が生まれれば、それが協働という形になっているのではないかと思います。

小池

ただ、西脇さんが言われたのは「もっと任せなさい」ということだと思います。しかし、市民側に任せた場合ですが、これは成功するとは限らないですね。もしかしたら失敗するかもしれない、上手くいかないかもしれない。その失敗というものが、行政が一番恐れることなのですし、市民会議もそれを許さないという体質があると私は思っています。ですから、そういう意味で行政は安全第一なのです。やはり、市民側に問題を提起するとすれば、行政側の失敗を許すという体質を持つべきだと私は思います。

安藤

失敗を恐れずに市民に任せる、ということですよ。先程から言っているように、今まではNPOというセクターは、非常に小さな組織であって、本当に隙間産業をちょこちょこやってきたというのが実態でした。それまで、何が大きかったかと言うと、やはり行政サービスが非常に大きくて、何でも行政がやっていた。行政がやらなくてよいことまで行政が手を出してきたというところに、行政の組織の肥大化と税の肥大化が起こってしまった。これは、逆に言うとうと、今求められている行政・税の肥大をどう縮小するかといった時に、民間に任せられる物は、全部民間に任せてしまうという、この決意がやはり必要なのですが、それをまた行政側は失敗するのではないかという恐れを感じているというところでしょうね。逆に言うとうと、行政側が民に任せるといふ時に、単に任せるといふのではないという所が、実はこのNPOとの関係であって、単に任せたら、いわゆる下請けかと西脇さんが言っていたわけですが、下請けではなくて民の力を持って行く形、つまりそれは、「お金は持っていないけど、知恵とパワーと思いはあるぞ」といふ、この部分をどのように活かせるかという所だと思ひます。

しかし、民がそれだけの力を持つためには、単に任せられるという必要もあるのかもしれませんが、どういふ風にすれば、民からも失敗してはいけないとか、言葉は悪いですが、何かあれば行政に言つて、民を叩くといういふような関係もしょっちゅうありますよね。そういうことでもいくと、民の方にもやはり問題があるし、公の方にも問題があるし、といういふような考え方をきちんと整理しながら、どう提案して、どうすれば良いのか考えて修正することがセンターの役割だと思ひうのですが、その辺を小池さんと西脇さんはどうお考えですか。

西脇

私達の会のことでも申し上げますと、活動当初からほとんどメンバーが子育て中、あるいは子育てが終わった家庭の主婦でした。ただ、私達主婦はほとんど社会経験もありませんし、活動を広げていくにあたっては人材不足というところがあります。そういう時に、ご自分の仕事をお辞めになり、新しい仕事のステップのためにということでも、たまたま区のホームヘルパー養成講座を受けられた方達が、私達の会へ入つて来てくださりまして、私達にはない力を発揮して、活動を広げてくれました。それから、もう一つの例を言ひますと、先程申し上げました、知的障害者のガイドヘルプということでも面白いことがありました。これはもしかしたら、今日ここにいらっしやっている方でも、初めて聞いた方も多いのではないかと思ひますが、知的障害者のガイドヘルプについて、あるいは知的障害者への理解を求めたいということでも、私達は映画会を催そうと思ひました。それも、なるべくたくさんの人に見て頂きたいと思ひまして、本当に無理は承知で、杉並公会堂で1日2回上映するということを決めました。杉並公会堂の担当の方から「大丈夫なのですか」と言われまして。

こういう手さぐりの状態で映画会の準備を始めましたが、新しくメンバーに

加わった、退職した男性は広報について非常にたくさんのアドバイスと実際的な活動に参加してくれまして、その結果として、「大成功に終わりましたね」と皆さんに言って頂いて、しかも皆さんがお帰りになる時に、「とても良い映画会をして下さいました。」と言って、喜んで帰って下さったのですが、それは私達が色々な方々達と一緒に活動していこうというスタンスを持っていて、そしてまた、それをある意味では、結果として区がサポートして養成講座を開いてくれたために、そういう人材が生まれたのではないのでしょうか。その方は今、ホームヘルパーとしては働いていませんが、様々な今まで培ってきた知恵を、私達に使うように提供してくれています。やはり、NPOとして活動していくうえに、人材、それに色々な意味でのしなやかさですね、それから失敗を恐れない。それぞれのNPOがこれからも動いていくということが大事なのではないかと思います。

安藤

ある意味では、NPOが動いていく時に、一つ大事な部分は、今、西脇さんは人材が必要だ、という言い方をしましたが、その通りだと思います。恐らく、こういったセンターが、その時の役割という部分で考えた時に、人も大事だけれども、色々な物が大事であるよということだと思います。センターが活動を進めていく時に人材も大事だけれど、その他に何が大事で、何を期待すれば良いのか、どういう役割を持ったら良いのかということに関して何かお考えはありますか。

小池

この辺は、先程の話しに出たと思いますが、行政活動と民間活動によって違いますが、現状を把握して必要な物を整備したり、あるいはセンターが役割というか力を持って、人材を育てていくような、そういった力を持つことが大事だと思います。これはただ単にアドバイスするだけではなくて、コーディネートすることが必要だと思います。情報はあるようで、実は結構バラバラでまとまっていませんから、このような会を開いたりすることによって、一つの事業的なものが展開出来るようになると思います。ですから、そういうネットワークを活かしたコーディネート機能を活かして雛を育てていくような感じが必要だと思います。これがこのような民間組織に求められることでしょうか。しかし、それをどうやって具体的に進めていくかということは、これからの問題ですね。

安藤

はい、ありがとうございます。あと5分程がこのセッションの予定時間になりますが、今、ずっとお話しをして頂きましたのは、実は区民懇談会準備会という中で、こういった物がセンターで必要なのではないか、というような議論を色々な角度から出して頂いた部分を、それぞれの立場に置き換えながら、今

日はご報告させて頂きました。

この議論の内容から分かりますように、このセンターに掛ける期待を、どういう風にして具現化していくかということが、多分これからの大きな動きです。行政との協働、企業、事業者との協働という部分をどういう風に作っていくのかというのが、正にインターメディアリーとしてのセンターの役割だろうと思っております。

このような観点から見たときに、では、これからこのセンターの協働と言っても、色々な協働の仕方があるわけですが、最初の企画から全部出して、そこからテーブルに載せて行うということが、正に協働だと思っておりますが、これは最近プラットフォーム型という言い方をしていますが、正にそういったものの場作りをこのセンターが仕掛けていくことが、一つ大事なことなのかなあと、今、お二人の対談の中から出て来ましたしこういったことをセンターが進めていくことが、これからは非常に大事であると感じました。

さて、残念ですが時間がありませんので、今まで、お二人で話したことを踏まえて、最後に一言ずつ、センターに期待するものと言っても、色々あって喋り切れなと思います。私だったらこういうことをしてみたいとかですね、もし自分がセンターに関わる立場であった場合に、私だったらこういうことをしてみたいという夢を語って頂けると、次の方に繋がると思うのでいかがですか？

小池

夢を語ると言いますか、具体的な夢はなかなか語りにくいのですが、先程もちょっと触れましたが、このセンターを運営するために、運営委員会というものが組織され、それから、その上に常任委員会というものが組織されました。そして、かつては、それが非常に社会福祉協議会と密接な関係にあって、かなり、社会福祉協議会の影響を受けるという形があったわけですが、このセンターにおいては、いかにその社会福祉協議会から独立した形で、企画、運営するかが課題と思っておりましたが、これは確立出来たと私は聞いております。そういう中で、運営委員会、あるいは常任委員会の中で、先程西脇さんがおっしゃった、ビジョンやコンセプトを確立していく、継承していく作業をきちんと行っていくべきだと思います。

西脇

夢はなかなか持ちにくいところもありますが、まず初めに、とにかくNPOの団体がどんどんセンターに来ること、これが夢です。そして、その来るための仕掛けを、まずセンターが作って欲しいなと思います。更に先程お話しが出ましたが、今までは、福祉の関係の方々がボランティアセンターをご利用になっていたということですが、その方々達だけではなくて、70ほどあるNPO団体が「そこに行ってみよう」と思うような企画をまず立てて欲しいと思います。それからもう一つ、これは夢というよりも懸念の方なのですが、私達福祉

の活動を今までしてきまして、障害をお持ちの方達が、このボランティアセンターを色々御利用になっていらっしゃいましたが、このセンターの性格が変わったために使い難くなったということにならないように、是非今までと同じような活動及びサポートが出来るように願っております。以上です。

安藤

はい、ありがとうございました。3年間にわたる色々な協働ということを含め、その拠点になるべきセンターのあり方を巡って、議論してきました。ただか1時間の中で全部言い表すことは到底出来ないわけですので、是非これは皆様方、何かの機会に、またここへおいでになった時にでも、様々な報告が出ておりますので、それに目を通すことをお願いすると同時に、今、お二方が言われたように、このセンターは行政のセンターではない。いわゆる、市民のNPOのためにセンターであり、自分達自身の物なのだということを、まず前提に置きながら、是非ここに入入りし、活用して欲しいものです。もし使い勝手が悪ければ、使い勝手が良いように作り変えていくというのも、ある意味では私達市民側の責任だと思っておりますので、そういう意味では今日おいで頂いた方々、また周辺の方々に対して、是非そんなことを呼び掛けて頂きながら、この杉並区という中における市民の活動が、より広がるということを是非皆さんと一緒に歩いていきたいと思ひまして、第1セッションを終わらせて頂きたいと思ひます。西脇さん、小池さん、ありがとうございました。